

回想（専門学校建築系学科 を離れるにあたり）



環境設備系教科
非常勤講師
三宅捷夫

この度、専門学校学生募集停止の報を知り、大変残念に思っている一人であります。

思い起こせば、平成5年、当時建築主理の鈴木光夫先生の依頼で建築設備科（夜間）のお手伝いをする事になり、以来13年半の間、設備系教科の非常勤講師を務めて参りました。この間、退職された設備系教科の先生の後を継いで昼間部の教科を兼務することになる内に、建築設備科が休講になり、設備科卒業生数も一頃の40名2クラスから、最後の年はたった1名になってしまいました。その間、小生も本務先の異動やら多忙が重なり「軽い脳梗塞」を患う等、思わぬ出来ごとがありました。本務先から「阪神淡路大震災の災害調査要員」として派遣され、ボランティア活動等の経験を直後の講義で学生諸君にお話したことを思い出します。

小生は、工学院大学高等学校普通科から工学院大学建築設備工学コースを卒業、中堅ゼネコンに入社後、以来38年の間、設計、積算、施工、支店勤務、海外工事、工事監理、社外協会の複数の委員等、一つの企業の建築設備の分野一筋で過ごして参りました。講義では諸々の失敗談、成功談、等体験をお話して、建築業界の常識、面白さ、難しさ、など興味を持つ事柄や、学生諸君の公的資格取得のための各種の資料作成と配布を行って来ました。嬉しかったことは、卒業生から「先生に教えてもらったことが出て資格が取れたよ」とか「もっと身を入れて聞いとけば良かったよ…今苦労しているよ」などと、近況を連絡してくれることです。中には、空調の負荷計算や風量の求め方など実務に就いて困ったことや、施工の方法を聞きに来てくれることです。

その時は、本当に「心から頑張れ」と思い、エールを送っております。又、設備科卒業生から結婚式に招かれ、晴れがましい新郎の笑顔に出会う時も、何とも言えない喜びを感じます。その家庭に二世が誕生し、微笑ましく健気に、慎ましく家庭を守り、建築設備の現場で懸命に働いている姿は、若い頃を見ているようで楽しみでもあります。その内、自分の歩んできた道の険しい場所(?)を教えて上げなければと…考えています。

閑話休題、少子化での現情勢で、学生を取り合うのは好ましいことではないと思います。

然し、専門学校の役目は本当に終わったのでしょうか？ 私は疑問に思っております。本来の役目は、社会で直ぐに使える技術屋を養成することではないのでしょうか、世の中に出た学生が専門知識を得たい、スキルアップするために自費で短い時間で本務先に迷惑をかけずに夜学で学ぶ、そんな学校が工学院大学専門学校であった筈です。

小生の本務先にも高卒で入社され、工学院大学専修学校で夜間学ばれ建築士を取得し、活躍をされた先輩が5～6名おられます。新宿という「ターミナル」に近く、学びたい社会人が多い現在、本来の工学院大学専門学校の姿に還って「役に立つ技術屋」を養成することは、最もニーズに合った「社会貢献」であると確信いたします。理論的に物を考える指導者の養成は大学に任せて、確実に黙々と実務をこなす技術屋を作る学校があっても良いと考えます。

派遣社員やニートの多い現在、一考あるべきと考えますが…如何？